

多面的な情報発信（政府広報や他の行政施策との連携）

- 内閣府政府広報室と連携して「米の消費拡大」に関する広報を実施。
- 朝食欠食改善や朝ごはん啓発のため、食品事業者等と連携し「めざましごはん」キャンペーンを実施。
- 食文化の保護・継承の取り組み、食育活動支援と連携して、主食としての米の魅力や大切さを発信。

政府広報と連携した情報発信



Smartnewsに
バナー広告掲示

テレビ「ミライの歩き方」 (R6年 2月)
ラジオ「青木源太・足立梨花 Sunday Collection」 (R5年12月)
Smartnewsバナー広告 (R5年10月)

「和食」の保護・継承における米の魅力発信

一般社団法人和食文化国民会議シンポジウム

和食と健康 2023初春

「お米」の魅力再発見

「お米」の恵みで健康に「賢い」食を考える

開催日時： 2023年2月20日（月）13:00-15:35（受付開始 12:30）
会場： 富士ソフト アキバプラザ6階 セミナールーム1（定員 60名）



「めざましごはん」による食習慣の情報発信



蔵のり: (株)日本海フーズ

食品関連事業者が朝ごはん商品群の販促可能ツールとして「めざましごはん」ロゴマークを無償で使用許諾。「早寝早起き朝ごはん」運動(文科省等)とも連携して食習慣の情報発信。

ごはん中心の「日本型食生活」の魅力発信



ごはんを中心とした
「日本型食生活」のススメ

ごはんを中心に、魚・肉・牛乳・乳製品・野菜・海藻・豆類・果物・茶など多様な副食などを組み合わせ、栄養バランスに優れた食生活です。



「日本型食生活」の実践等を促進するため、セミナー開催等の地域実情に応じた食育関連の情報発信を支援。

※農林水産省「日本型食生活のススメ」
「令和4年度食育白書」 から引用

多面的な情報発信（展示会や刊行物における情報発信）

- 部分執筆やデータ提供等により、書籍や雑誌などの出版物に特集記事等を掲載して貰うことで、幅広く多様な消費者に米や米食の魅力を発信。
- 一般展示会へのブース出展、省内「消費者の部屋」展示等により、消費者と直接交流しつつ米や米食の魅力を発信。

展示会出展、「消費者の部屋」での展示、等



『お米の魅力に迫る！』 2023年9月4～8日 消費者の部屋
パネルや動画を使って米や米粉の魅力を紹介、製品展示やレシピ紹介を実施



『GOOD LIFE フェア 2023』
2023年9月1～3日 東京ビッグサイト
水田の多面的機能、全国おにぎりMAP等により消費者にお米の魅力を紹介

出版物等への部分執筆、データ提供等



発行：2023年4月12日
日本食糧新聞社



発行：2023年6月7日
農林水産省広報室



発行：2023年8月1日
商経アドバイス社



発行：2023年9月25日
NHK出版社



出版：2023年11月号
「月刊コロンブス」
東方通信社

○生産コスト低減に向けた具体的な取組

- 担い手への農地集積・集約を加速化するとともに大規模経営に適合した省力栽培技術・品種の開発・導入を進め、産業界の努力も反映して農機具費等の生産資材費の低減を推進。

省力栽培技術の導入

直播栽培

育苗・田植えを省略。

直播栽培に適した水管理と雑草管理ができれば、労力削減とコスト低減につながる。

コーティング無しの直播技術も発展。



鉄コーティング種子

無人ヘリやドローンの活用も可能



スマート農業技術の活用

(例)

営農管理システムの導入

→作業のムダを見つけて手順を改善。

水管理システム

→水管理の見回りを削減。

ドローンの活用

→農薬・肥料散布の労力軽減。



高密度播種苗栽培

育苗箱数・床土使用量を減らせるため、資材費の低減が可能。
田植機への苗供給も少なく省力的。



肥料の節約

- 育苗箱全量施肥：緩効性肥料を育苗箱に施用することで、追肥を省略でき、肥料減・省力化を図る。
- 流し込み施肥：肥料を水口から流し込むことで、追肥作業を省力化。

大規模経営に適合した品種

多収品種

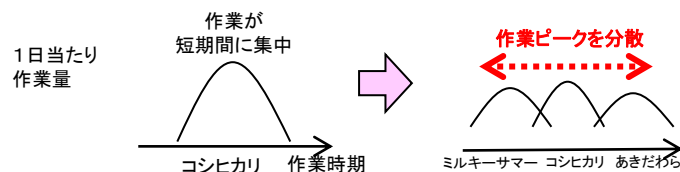
多収品種による増収で、60kg当たりのコストを低減。

(品種例)

- ・つきあかり
- ・にじのきらめき

作期の異なる品種の組み合わせ

作期を分散することで、同じ人数で作付を拡大でき、機械稼働率も向上



担い手への農地集積・集約等

- 2023年までに全農地面積の8割を担い手に集積

- ・ 分散錯圃の解消
- ・ 農地の大区画化、汎用化

生産資材費の低減

農業機械の低価格化

- ・ 全農では、農業者のニーズを踏まえて機能を絞り込んだ仕様を決定し、最も高い要求を満たした農機メーカーから農機を共同購入。
- ・ 基本性能を絞った海外向けモデルの国内展開



肥料コストの低減

- ・ 土壌診断に基づく施肥量の適正化（肥料の自家配合等）、精密可変施肥
- ・ 化学肥料から鶏糞等への転換
- ・ 共同購入、大口購入による価格交渉
- ・ フレキシブルコンテナの利用（機械化による省力化等）



合理的な農薬使用

- ・ 発生予察による効果的かつ効率的防除
- ・ 輪作体系や抵抗性品種の導入等の多様な手法を組み合わせた防除（IPM）
⇒ 化学農薬使用量抑制

未利用資源の活用

- ・ 鶏糞焼却灰等の利用



- 生産コスト削減に活用可能な技術をまとめた「担い手農家の経営革新に資する稲作技術カタログ」を作成し、公開しています。

http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/info/inasaku_catalog.html（「稲作技術カタログ」で検索！）